
ミステルス～赤き桜の奇跡～

枢 六

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミステルス〜赤き桜の奇跡〜

【Nコード】

N5159T

【作者名】

枢 六

【あらすじ】

2XXX年今では日本の3大家系が世界の経済を支配していた。三大家系のひとつ桐生家次期当主 桐生 裕は自分の名前を偽り一般の高校へ将来の嫁候補を探し通っている。だが、とある事件により自分の招待が判明してしまったことにより転校が余儀なくされた。主人公ハーレム状態で進んでいきます！！目指せ！！ギャルゲー化（笑）

真実と嘘（前書き）

駄作ですがよろしく願います！！誤字や表現不足の点は見逃してやってくださいorz

真実と嘘

9月7日

がたがた電車がゆれている。

今は宮の駅と安島駅の間地点にあたる位置だ。

今は午前7時30分通勤ラッシュの時間帯だ。

今日も多くの人に潰されそうになりながら学校に通っている。

近くを見渡すと同じ制服を着た学生たちも多く乗っている。

だが、やはり社会人の方が多い。

その中に一人の同じクラスの女子、三崎叶がいた。

彼女はクラス委員であり勉強は学年トップクラス。

それに加えて美人でもあった。

しかし今日はいつもと顔色が違った。

風邪をひいているようにも見えない、もしやと思い彼女の隣まで人
をかき分けて近づいた。

案の定予測は当たった。彼女は痴漢の被害を受けていた。

俺は彼女を守るためまずバッグから携帯を取り出し痴漢が行われている現場証拠を写真で撮る。

そして、その写真をとある人に送った、撮った写真は6枚。痴漢現場と犯人の顔だ。

そして、俺は行動を起こす。「ねえ？おじさん達年甲斐もなく痴漢なんてやめたら、それも二人で何てサイテーだよ」

俺は痴漢を行っている人物に対してまわりの人にも聞こえるように話かける。

その直後周りがざわめき始める。「何を根拠にそんなこと言ってるだ君は」「勝手に人を犯人扱いしないでくれ！！」少し怒った口調で話しかけてくる。

「この写真を見てもまだそんなこと言えるの？」俺は痴漢の決定的瞬間をおさめた写真を見せつける。

『なっ！！』痴漢を行っていたおじさん達が固まる。そして俺は近くの乗客にも写真をみせる。

「ねえ？三崎さん今痴漢を受けていたよね？正直に話して。怖くて話せないならうなずいてくれ。絶対俺が君を守るから！！」俺がやさしく話しかける。

「ありがとう・・・桐谷君。今私はこの人たちから痴漢を受けていました。」彼女がそう言った瞬間犯人達の顔色が一転した。

「この糞ガキが！！」

最後の抵抗とばかりに俺に殴り掛かってきた。俺はそれを殴られるフリをしながら倒れる。

またざわめきが起きた。そんなの関係ない。

俺はこれで正当防衛ができるのだ。すぐさま立ち上がる。乗客は見守ることしかできないようだ。

俺はまず一人目の犯人に向けてパンチを顔面に送った。相手も武術経験者らしくパンチを防いだがこのパンチはあくまでおとり。

俺はすぐさまもう一方の拳を脇腹に入れる。さすがに防ぎきれず会えなく気絶した。

二人目の犯人はナイフを出してきて俺に向かって突いてきた。だが犯人の顔は必死。

こんな時ナイフを使う方がバカだと思う。

この時の相手の心理状況はナイフを持っているから相手より有利に戦えると思っていからだ。

だが、この時こそ相手の握っているナイフは案外軽く握られていことが多いのだ。

俺はナイフを握っている手にキックを放つ。犯人はナイフに攻撃を行ってくと予測ができなかったため、攻撃が当たりナイフが床に落ち、鈍い音が床に響く。

「そのナイフ拾ってください!!」俺は乗客に指令をだす。

乗客の一人がナイフを犯人から奪った。これで相手は戦意喪失。

俺は犯人の首に軽い衝撃を当たえ気絶させた。同時に周りから壮大な歓声が聞こえてきた。

「三崎さん。これで大丈夫。ごめんな、すぐに助けられなくて、
」俺は謝る。

深い謝罪の気持ちと共に。

「ありがとう。桐谷君のおかげで痴漢が少して終わったよ!!」

三崎さんが俺に抱き着いてきた。ひゅゅゅ!!周りに今度はおめでたコールが起きた。

これでひと段落したな。はあ〜疲れた。

おっと自己紹介が遅れてごめん。俺は桐谷 龍也。ちょっと大きな問題を抱えている高校1年生だ。

真実と嘘（後書き）

読んでいただきありがとうございます！！ぜひ評価お願いします！！

賞賛

9月7日

その後、痴漢を行っていた犯人を警察に突き渡した。

これで痴漢を少しは抑制できるかな？

俺はその後、警察の事情聴取後、通っている県立碌参高校に着いた
！！

別に特別頭がいいわけでもなく、スポーツも有名ではない高校だ。

唯一駅から近いところが取り柄の学校だ。

授業には少し遅れた。俺はクラスに入るなり驚いた。

いきなり大声で俺を称賛し始めたのだ。先生に至っては「お前はこ
の学校の勇者だ〜！！」

と意味不明なことまで言い始め、女子からは「これからも女子の敵
を殺ってね！！」

微妙に怖いような、、、、、、、

俺は、その後数日間は、多くの人に褒め言葉を頂いていた。

「ふゝゝ！疲れたゝゝ」俺は大きなため息をついた。

俺は今日の出来事の対応に疲れて机にうつぶせになっていると、

「なんで、そんな大きなため息ついてるの？」「お前は勇者だからもつと胸張れよ！！」

「そうよ！龍也は女子の味方に認められたんだから！！」

急に声をかけられた。こいつらは俺がいつもよくつるんでいる悪友だ。

話しかけられた順に 花園 美沙・園崎 六・井口 凜の方々。

美沙は少しツンデレ気味のペチャパイ少女。

六はただの変態メガネ。

凜は巨乳のボーイッシュな少女だ。

「誰がペチャパイだ!」「俺はなんで変態メガネなんだよ!」「
お、僕の紹介はましたね」

三人が俺の心の中の紹介に突っ込みを入れた。

いや、おかしいだろ。なんでこいつら俺の心の声が聞こえてるんだ?

俺は疑問を抱えながらも顔を上げた。

「いや勇者になるつもりさらさらないんだけど。むしろ助けない人の心を疑うよ!」本音

を呟く。

「さすが〜!言うことがさすがだな」と六が言う。

「僕もその現場見たかったな〜」と凜が。

こんなg d g dな会話をしながら休み時間が終わり、学校も終了した。

9月8日

次の日、俺はいつもどおり電車で揺られながら学校にこうとしていた。

ちょうど駅と駅の間地点に差し掛かったとき、俺に何者かが声を小さな声でかけて聞きた。

た。

「ちょっと兄ちゃん。昨日は俺たちの仲間をよくも警察に送ってくれたな！！まあ言いた

いことはちょっとばかり俺についてきてくれないか？反論は言わせないぜ！！」20代半

ばの男が俺にナイフを突きつけて脅してきた。

まあ集団痴漢グループを一挙に摘発できるなら、ついて行ってもいいか。

「ちょっとまって。学校に遅れることを友達にメールするから」俺はこの話にのった。

〈六視点〉

おっ！誰かからメールが来たな。誰やろつか？携帯を開く。龍也からや、何て

>今日は体調が優れないから学校遅れる！！先生によろしくなんやて？

数メートル先に龍也がいた。分からなかった、一緒にいた凜と美沙そして三崎さんに聞い

てみた。「なあ？なんか龍也が今日、体調が優れないから学校おくれるんやて！！だけどあ

そこにいるの龍也だよな？」と聞いてみると「そうだね！あそこにいるのたしかに龍也だ。」

凜がすぐさま俺の質問を返してくれた。

「確かに？でもどうしてなのかな？」三崎さんが答えた。うんうんと美沙も頷く。

この疑問をどうしようかと話し合っていたら駅に着いた。龍也は学校とは反対方向に若い

男と歩いて行った。俺たちはこの際学校は放置して、龍也の謎を明かそうと追跡を開始し

た。

仲間（前書き）

少ないですが、、

仲間

（六視点）

俺たちは各々友達へ学校を遅れると伝えた。

龍也はやはり、さっき電車の中で話していた若い男と一緒にどこかへ行っていた。

「龍也はどこに行くんやろうか？こっちの方角はたしか使われてない倉庫の方面だったよ

な？」俺は自分の中のあいまいな記憶を頼りにして問いかけた。

「そうそう。こっちはでかい倉庫群だったよ。けど、たしか今は使われてなくて、撤去

するかどうかで問題になってたはず。。。」「クラス委員長の三崎さんがすぐに返答してくれた。

そうして数分後やはり予想道理にでかい倉庫群に着いた。

（なぜ龍也がここに来るんだ？謎が深まるばかりや。ここはコナ。君に推理してもらいな

あかんww）

六視点終了

俺は電車から降りると、ナイフを突きつけてきた男について行った。途中で同じ学校の

連中にあつたが忘れ物を取りに帰っているようにしか見えなかったらしい。

俺はメールをもう一度とある人に送った。内容はα502。まあこの暗号を分かった

やつはすごいがこの若い男に理解できるはずはない。だから若い男もこのメールを無視し

た。メールを終えた後また無言のまま若い男について行った。

（このまま歩くと確か倉庫群だったよな。たしかにあそこならだれも来ることはないな。）

俺は数分後思っていたことが的中していた。

倉庫群のとある倉庫の前まで来た。

「兄ちゃんここだぜ！！はやく入ってくれ、俺たちの仲間が待つくたびれてる。」

若い男はまた俺にナイフを突きつけてきた。どうやら、この男は俺が武芸が少しも

できるとは思っていないらしい。と、ゆうよりも前回の事件でどう

やって俺が

あの男たちを捕まえたのか知らないらしい。

中にはいつて驚いた。痴漢集団グループの人数がとてつもなく多かつた。

全体で200人を超えているからだ。それに年齢はバラバラ。爺さんもいた。

俺は確信した。ここが日本最大の痴漢グループだと。

そうして俺は愉快的痴漢者連中の真ん中に連れて行かれ、若い男が

「我が同志たちよ。先日俺たちの仲間が警察に逮捕された。実に残念なことだ。

そこで今日我が同志を警察に売り渡した、この男に制裁を加えようと思う。

同志よ準備はいいか~~~~~!!」若い男が大声で言い放つ。

そこにいた男たちは歓声を上げた。とその瞬間誰かが新たに誰かを連れてきたようだ。

誰だ？痴漢者連中は声があがる。そこにいたのは、三崎さん・六・美沙・凜の4人だった。

仲間（後書き）

感想ぜひ書いてください！！

発覚（前書き）

今回も少ないですが、、、、

発覚

く六視点く

やっと龍也が倉庫群のとある倉庫の中に入った。

俺たちは、周りに敵がいないことを確認し倉庫の壊れて中が見える部分から中の様子を確認した。

中には百人を優に超す年齢が多種多様の男たちがいた。

「なんやこいつらは？」ここいいた全員が驚いた。

龍也が多くの男相手に戦おうとしていたのだ。

「警察に連絡しなきゃ」美沙が大慌てで携帯を出そうとした瞬間突然大声がした。

「お前ら！！そこで何してる！！その制服はあいつの仲間か！ちようどいいお前らも来い！！」

数人の男たちが俺たちを包囲した。

やばい！！かなりヤバイ！！どうしよか？俺たちは抵抗もできず倉庫の中に連れて行かれた。

く六視点終了く

4人が俺の前に突き出された。

「なんで、お前らがここにいるんだ!？」俺が聞く。

「なんでって、僕たちが学校に普通に登校している仲ときに龍也がいて、休むって言うから心配で

「ついてきたんだよ」凛が怒鳴る。

「分かった。ありがとう！！でもここは危険すぎる、俺から絶対に離れるな。いいかみんな！！」

俺は4人に忠告をかけた。

「さあ、兄ちゃんたち。茶番は終わったかな？これが最後の仲間との会話になるな～～！！」

[illegible]

「最後に質問する！！お前らは桐生家系列の子会社だな？」俺は男
たちに問う。

「どうせ、最後だから教えてやるよ！！お前の言うとおりであるぜ
」一人の気が狂った男が答え

た。

「もう、時間の無駄だ！！おい片づけるぞ！！女は生かせ！！男は殺せ！！」一人の男の

声で俺たちに総攻撃が始まった。

だが俺には問題ない。このくらいの人数余裕で終わらせることができる。

しかし、4人をどうするかが問題だ。

俺は最初に来た男たちを空中散歩に招待した。その後、落ちてきた男たちは衝撃にもだえ苦しむ。

さすがにこれを見た男たちは少し戸惑った。

これぐらいでいいだろう。これ以上こいつらを危険にさらすわけにはいかない。

「アルファー！！ガンマ！！出撃！こいつらを取り押さえろ。」男たちが少し怯んだと同時に叫ぶ。

「な〜に言ってるの？兄ちゃん頭大丈夫？ひやはははははは」男たちが笑った。

同時にガラスが割れる音・天井の板が剥がれる音・扉が壊される男が倉庫中に響いた。

「お前ら！！武器を捨てて地面に伏せろ。さもないと発砲は免れん！！」黒い防弾メットを被った

男たちが痴漢集団に銃を突きつける。

「痴漢集団」

全身黒に身を包んだ最新装備の男たち。俺は分かった。こいつらは桐生家直属のエリート部隊だと。

それも胸の赤の魔法陣。これは桐生家次期党首 桐生 裕の直屬部隊だと。

でもおかしい何故あの男が直屬動かせるんだ？

まさか！！あいつが 桐生 裕だと、、、それなら結論がつく。

なぜ、あいつがあんな質問をしたことも。

終わった。人生の終わりが見えた。とんでもない人に喧嘩を仕掛けたのだ。

痴漢集団はこの部隊が桐生家のものと気づくものもいれば反逆して逆らうものいたがすぐに

取り押さえられ反逆は終了。

ここにいるすべてのものの家族が崩壊した瞬間だった。

～痴漢集団視点終了～

～六視点～

スゲ～～！！俺は今感激している！！目の前にあこがれたいた桐生家の直屬部隊が行動をしているから

だ。

てか、何で龍也の声で動いたんだ？

「桐谷くんまさか桐生家の人間？」三崎さんが龍也に尋ねた。俺もこの質問で謎が解明した。

「まさか、こんなに早く見つかるとは思わなかったよ。俺は 桐生 裕だ」龍也が自分の正体を

明かした。

身近にいた親友が世界企業の御曹司であり、全世界が探し求めている人間。

俺は悟。龍也いや裕がもう俺たちの傍からいなくなること、
、
、

発覚（後書き）

感想お願いします!!

時間（前書き）

文章が下手でスミマセン>（
――）<

時間

「裕様、ターゲット確保終了しました。」アルファアの隊員が俺に作戦終了の告げた。

「これよりターゲットを速やかに警察に引き渡し作戦を終了する。木山あとは任せた」俺は

直属部隊ウルフのリーダーに指揮権を譲り4人のもとに駆け寄る。

「今回はすまなかったな。危険に巻き込んでしまつて、、、」

「いいよ、僕は気にしてないから。」凜が答える。

「どういうこと龍也？なんで桐生家の人間がここにいるの？」美沙が少し強めに聞いてくる。

「お前らは知っているだろう。桐生家の人間が民間人に紛れてるところがあると？」俺は逆に

質問を返した。

「そりゃあ知ってるけど。けどその話都市伝説みたいなものだから。美沙が少し弱気になった。

「都市伝説か、、、。なんで桐生家の人間が危険を冒してまでこんなことをするか教えるよ。

俺たちの考えは自分が好きになった人間と結婚してほしい。ただ

それだけだ。

許嫁がいても両者が両方を好きになっ
ていないまま結婚しても仕
事に支障が出るだけ。

俺たちはそう考えている。許嫁が
悪いとは言わん。ただ自分の
気に正直になっ

欲しいただそれだけさ。だから俺も
この一般の学校に入っ
て自分と共に人生を歩い

くれる人を探してただけさ。だが今
回俺の正体がばれたこと
により、もう碌参高校

にはそう長くは通えないな。せいぜ
い後1週間が限度だな。短い
期間だったけど

楽しかったぜww」そう言っ
と、周りの空気が暗くなっ

「じゃあ、両親の役をしていた人
は誰なんや？」六が質問する。

「俺は俺の専属spだ。まあ夫婦
なのは本当なんだがな。」質
問に答える、

「じゃあ、学校はもう行かないの？」
三崎さんが心配するように聞
いてきた。

「大丈夫。俺はそのあと天神高校に
通うことになる。名前は桐生
じゃないけどな。」

俺が言った言葉に驚く。

「なんで天神高校で本名を名乗らないの？」美沙が聞いてくる。

「名前は明かすけど、それは転校して1か月たったくらいかな？いきなり正体をあかすとトンデモ

ないことになるから。」

こんな質問が数十分続いた。

「裕様！！大丈夫ですか~~~~~」突然声が倉庫に響いた。

時間（後書き）

評価お願いします!!

S P

突然俺の名前が呼ばれた。

名前が呼ばれた先には同じ制服を着た男がいた。

身長は180cmくらいの青年。彼は俺のS Pの一人 高塚 響。

才色兼備の2年生。表向きは人気があるが実際はS P一筋の熱血男なんだ、、、

まあ、人柄は人それぞれなんだけどね。

「やっと来たか！！お前にしてはかなり遅いじゃないかww」俺が響に問う。

「すみません！！裕様！学校を抜けようとしたのですが、女子生徒に捕まってしまい遅くなってしましました。申し訳ありません。」響が精一杯謝る。

「えーーーー！！響先輩が龍也のS Pだったなんて。ウソでしょ、、、」凛が驚く。

そりゃそうだ。響は学校では男の人気ランキングトップ5に入るくらい人気があったような。

凛は響が憧れの先輩だったらしい。これこれで面白い光景なんだよな。

「裕様こちらの生徒たちは？」響はこいつらを知らないらしい。

まあ、学校では人気のため俺のいる場所まで来ようと頑張っているが、途中でいつも

他の生徒に捕まりそのままどこかへ拉致されているからだ。

いつもその光景を見るのが楽しいんだけどね W W

「こいつらは俺が学校でいつもつるんでいる仲間だよ。」

「ありがとうございます！！さっそく転校の手続きを行っておりだいたい2週間後に

転校の手続きが終了しだい転校となります。遅くなるわけは、当主様から碌産高校で最後を楽しんでこいといった指示があったからです。ご了承ください。」響がさっそく行動を起こしていたようだ。

まったく親父のやつ、、、うれしいじゃないか。

俺は1週間と見込んでいた転校の期限が親父のやつによって1週間伸びたのだ。

「龍也よかったやないか！あつ裕だな。まあ後2週間短いけどよろしくな」六が言ってきた。

「僕もうれしいよ!! 短い付き合いだったけどあと2週間よろしく

「！！！」と凜が。

「後2週間か、、短いけど2週間私たちに付き合ってよ！絶対な
んだから」美沙が少し

泣きそうになりながら言ってきた。

「裕君！！私忘れないからね！転校してもずっと友達だから」と三
崎さんが。

「ゴメンな。まあ転校しても時間があつたらまた来るさ。あと学校
では龍也でよろしくな！！なにか

困つたら相談に来てくれ！！全力でサポートするからさ。」

明るく答える。なぜか転校間際の会話になっていた

その後、2時過ぎに学校に到着。

学校を遅刻しているメンバー全員でクラスに入つたため怪しまれ
た。

「ここが、裕のいる学校ね。2週間の転校生活楽しませてもうわ
！！」金髪ストレートヘアの少女が

宣言をした。

「ここに裕君がいるんだね！！誰にも邪魔はさせないんだから、
フフフフ」

まるでかぐや姫を再現したような大和撫子の少女も続けて発言した。

SP（後書き）

読んでいただきありがとうございます！！！！ぜひ感想ください！！

転校生（前書き）

投稿遅れてすみません！！評価・お気に入り登録をしていただいた
かたありがとうございます>（――）<

転校生

キンコンカンカンスHRを知らせるチャイムが鳴った。

結局昨日の件については、六が終止符を打ってくれた。

「俺は龍也が誰でもいい。結局は今までの付き合いは俺たちの関係を壊す

ものにはならんからな！！2週間と短い時間だけどこれまで以上に友情を

築こつや！！」そう言ってくれたおかげでその現場にいた皆からは距離を置かれることにはなかったわけだ。このことに関しては本当に感謝し

ている。実際残りの2週間はどうなるかは少し不安があつたが、今となつては

逆に最後まで楽しみたいと思うくらいになっていた。皆に感謝だな。

そう考えていたら、鬼教師の鬼平が入ってきた。鬼平は痴漢事件のさいに

俺に抱き着いてきた教師だ。普段は威厳のある先生なんだが、生徒が社会の役に立った場合は急におかしくなることがしばしば。

しかし、今日はずっと違和感や不安や恐怖といった顔があるような気がする。

「なあ？今日はなんでこんなにヘリが飛んでいるんだ？しかも黒服の男が

いるみたいなんだけど？」クラスメイトが他のクラスメイトに話しかける。

どうも学校の付近で何かがあったようだ。

「鬼平センサー！！今日はやけに緊張してますね？何かあるんですか？」凜が聞いた。

「今日は転校生がこのクラスに来ることになった。みんな仲よくしてくれ！！」

先生は凜の言ったことを無視し話を進めた。

しかし、転校生とは驚きだ。転校生が来ることになってるなら昨日のうちに騒がれてい

るからだ。急な転校だったのだろう。

「お二方、入ってください。」先生がほぼ棒読み状態で転校生をクラスに呼び入れた。

それにしても、転校生に対して敬語とは驚きだな、、、

ガラッ！扉が開いた。そこにいたのは女子が二人。俺はこいつらを

知っていた。

「初めまして！！霧神ルナです！今日から2週間よろしくね！！！」

「初めましてです！！尾崎姫です！ルナちゃんと同じく2週間よろしく」

「お願いします！」

御三家の二つの家系の長女が登場してきた。みんなは、最初は可愛いやら

なんやらで騒いでいたが、名前を聞いた瞬間時が止まったように静かになったが

高校生の好奇心は強い！！先生が何か質問あるかと聞いてきた！！

「はい！！！！なんで御三家のお二方がこんな学校にきてるのですか？」凜が

さすがとばかりに聞いた。

「それは私たちのフィアンセがこの学校にいるからですよ！」姫が答えた。

その瞬間クラスから大声が発生した。

転校生（後書き）

評価おねがいします！！感想募集中です！！

脱走（前書き）

PV1000きました！！まだ少ないですが頑張っていこうと思います！！

脱走

おい！おい！おい！おい！おい！どういうことだよ！！

何でこいつらが転校してくるんだよ、、、とにかく見つかったら正体がばらされるのも時間の

問題になりそうだ、、、どうすればいい？

とりあえず、脱走しよう！！そして響の所に逃げよう。俺はSHRを放棄して脱走した。

俺はあの二人に見つからないように教室から出て行った。一番後ろの席だったため、簡単に抜け出すこ

とはできた。

ここで、あの二人を紹介しよう。

あの二人は御三家の霧神・尾崎の長女だ。しかも俺との幼馴染。まあ、あいつらは兄がいるため、

当主こそならないが、両方の家系それぞれの重要な役職に就くだろう。

しかもあいつらが転校してきた理由はたぶん俺を見つけるため。

あいつらの紹介はのち細詳しく紹介しよう。俺は今日何時からでた後、トイレでSHRが終わるまで

待機した。

キーンコーンカーンコーンSHRの終了を知らせるチャイムがなった。

響は一つ上の学年にいる、2年だ。チャイムがなったと同時にトイレから、響のいる教室に

同学年の生徒に合わないように走っていった。

響のいるクラスもの前についた。やはりあいつは人気だった。周りには人が絶えていない。

「すみません先輩！！響先輩呼んでもらえますか？」俺は響の属しているクラスから出てきた

女の生徒に声をかけ響を呼んでもらった。なぜか声のかけた女子生徒は響を呼び終えた後

友達と思われるほかの女子生徒に何かを自慢していたようだ。たぶん響に声を今までかけられなかった

ため俺の依頼で話せたことを自慢しているのだろう。

「響サイド」

「ねえねえ！！響君。外で龍也君が呼んでいるよ！何か焦ってたみたいだったけど・・・」

クラスメイトが裕様が廊下で俺を呼んでいるらしい。早くいかなければ。

俺は話していたクラスメイトと会話を中止し裕様の元へいそいだ。

途中このことを教えてくれた女子生徒が龍也君に話しかけられたと自慢していたようだ。

裕様は学校内でもかなりの女子に知られている。人気みたいだ。

「どうしたんだ？」あくまでもここは学校だ後輩に敬語を使うのはおかしいため、人が

いるときは、敬語を使わない。俺はこのことについてはあまり乗り気ではない。

「ちょっと話が・・・人がいないところで話すからここから離れよう。」何か困ったことが

発生したようだ。俺たちは学校で人気がない理科室で話すことになった。

理科室に到着。「どうしたのですか？」俺はさっそく聞いた。

「まずいことになった。ルナと姫が転校してきたんだ。たぶんあいつらは俺を探しに来たんだと思う。」

それに、見つけれたら絶対に招待を明かされる。この情報は響の所には届いていないのか？」

俺は衝撃的事実を聞いた。ルナお嬢様と姫お嬢様がこの学校に転校してきたというのだ。

「すみません！そのような情報はまだ私の耳には届いていません！
」

本当に聞いていなかった。どうする、教室に帰ってもばれるのは時間の問題になる。

俺たちは、少しの間解決策を考えた、、

脱走（後書き）

読んでくださりありがとうございます！！

評価をしていただいた方・お気に入りになしていただいた方にマジ感謝です！！

ぜひ評価お願いします！！

脱走？（前書き）

またまた評価していただきありがとうございます！！文章力が下手ですがよろしく願います！！そろそろ分岐ルート考えています。良ければ感想で誰からしたらよいか書いてください！！

脱走？

く六サイドく

どうしたんやろうか??

せつかく同じ御三家のたぶん知り合いが転校してきたというのに、顔を見た瞬間逃げ出すなんて、、

何か理由があるんやな。親友としてSHRが終わったら聞くか!!

みんなが御三家のお二方にワイワイなってる間にそう考えた。

それにしても、ルナちゃんマジ可愛いわくく!!よし、ここは俺のナンパテクニクを

クラスの連中に見せつけるチャンスや!!ここでルナちゃんを落ちしたら俺は大金持ちで、

それもぬふふふつつふふふつつふふふつふ。

周りはこの六を引いていた、いや逆にクラスのワイワイガヤガヤの雰囲気が一瞬にして崩壊して

静まっていたのだ、、、、、、、、

あれ・・・・?何で俺の方悲しい目で見てるの?えっ、、、、なん
でくくくくくくくくくくくくくくく or z

ルナちゃんは?何あの目・あれは絶対にキモい・変態ヤロー近づく

[illegible]

「ルナちゃん！！好きな人ってどんな人ですか？？てか今好きな人いるからここに来たんですか？？」

「ノーコメントで！……ごめんなさいね！……」笑顔だった、けど少し怖かった。

やっぱリルナちゃんから姫ちゃんに移るわ〜〜〜〜！！！！

なんて思って姬ちゃんまで後数メートルまで来たところで……

ルナの拳が顔面に炸裂。そのまま、六は撃沈となった。

俺の恋が~~~~~と嘆きつつSHRが終わった。

六はそのまま保健室送りとなって改めて霧神の名がおそれられた。

脱走？（後書き）

今回はもう一つの方の話でした。
ぜひ評価・感想お聞かせください！

世界観（前書き）

ここまできてこの話の全体像を説明したいと思います。

世界観

今から何十年も前の世界でとある殺人感染症がアフリカで発生した。

エボラウイルスとインフルエンザが突然変異を起こし、この二つの病ウイルスが一つになったのだ。

ただでさえ、発症したら死亡率が高いエボラウイルスと感染力が強
く間違えたら死にいたる

このウイルスがアフリカを中心とし全世界に広まっていった。

全世界のウイルス研究者や組織が薬の開発に力を注いだが無意味で
あった。

発症して二日後には死亡、ただでさえ死と隣り合わせのこの薬の開
発は無理と世論が広まり始め、

世界の人口は100億を超すといわれていたが、逆に人口が急激に
減り始め、

人口増加の原因とさえれていたアジア・アフリカの発展途上国は衛
生状態や病院の管理が

ただせさえ悪いためその国自体がこの病気で無くなったところまで
あったそう、

世界が終焉を迎えようとしたときとある機関がこの病気の特効薬を
開発した。

それが、日本の御三家 桐生・霧神・尾崎の合同薬開発機関 MO ONだ。

この特効薬は、病原菌を体内で殺し、人体には影響がないというきわめて珍しい薬でもあったのだ。

大量生産ができないが、日本中にすぐに特効薬が周り、日本から病気がほとんどなくなった。

世界でこの薬の製造方法と薬をくれときたが、製造方法を教えたが今までとはつくりが違う機械

を使用して作っていたため、国外での製造は困難をきわめた。

御三家は世界の大国にこの薬を売らずに発生がひどい国に対して無料を提供し、

大国には一つ20000円という高額な値段で売ると決めた。

大国の市民は高くても自分は感染したくない、助かりたいと政府に対して、早く購入することを求めた

このことにより御三家はただでさえ強かった世界に対しての発言力が高まった。それに、

御三家の資産がさらに増えることにもつながったのだ。

この後、薬の値段は高すぎたと大国の世論が言い始めたころ、またこの病気が大国を中心に発生した。

まだ名前を言ってなかったな。このウイルスの名前はV G Wウイルスという名前が付けられた。

V G Wウイルスの特効薬のかいはつ技術はまだ大国でも使用が不可能だった。

そのため、薬は高すぎるとイチャモンをつけてきた大国には薬を提供しないと言っていたため、

再び発生した大国の特効薬はすぐになくなり、また頭を下げてまで薬を買うことになった。

それから現代にいたり、ようやくこの技術は理解され始めてきていた。

キャラクター紹介

桐生 裕（桐谷 龍也） 15歳 10月18日

特技 趣味・・・ 武術全般（達人以上） 株 読書 友達をからかう

設定・・・ 幼い時から武術を叩き込まれて今では武術の達人でも敵わない。

ただし武術の名門 霧神家当主には互角もしくはそ

れ以下。

周りからは武術とは遠い存在になっている。

算に近い。

株の動かし方がうまいため、全財産が大国の国家予

友達に恵まれ、よくからかっている。

ている。

勉強はでき、テストではトップ3の中にいつも入っ

恋愛は好きだが自分がする気は全くない。

っている。

学校ではモテているが告白されるもいつも丁寧な断

外見・・・身長 170? 体重 58キロ

髪はストレートだが少しくせ毛がある やせ形

メインヒロイン

霧神 ルナ・・・

主人公の幼馴染。

また武術の達人（裕には敵わない）
日本3大財閥の一つ。

特徴 . . ツンデレ気味。しかし裕には甘いところが多く見かけられる。

ラスメイトから よくクラスでリーダーシップをとってるためク

人は裕一筋なため、 厚い信頼を勝ち得ている（天神高校では）。本ほかの男子に

に告白をしようと 告白を受けてもきっぱり断っている。過去に裕

終わった。 したが告白当日にルナが熱をだし告白は失敗に

には敵わない。 武術では霧神流武術を取得しているがなぜか裕

外見 . . 身長 158? 体重 44キロ
B 80 W 52 H 81

いつもはポニーテール。 ロングストレートで腰ぐらゐまで伸びている。

尾崎 姫 . . もう一人の幼馴染。
ピアノは世界トップクラスの實力の持ち主。
日本三大財閥の一つ。

特徴 . . やや主人公のことになるとヤンデレ気味になる。
名前のごとく話かたは優雅で日本古来の姫のイメージを

のなかでは

思わせる雰囲気を持っている。穏やかで五人組

突っ込みとボケの両方を担当している。

ルナが裕のことを好きと知っていて応援しつつも

実際は姫も裕のことが好き。幼いころ裕に誘拐

犯に連れて行かれそう

所を助けてもらったことが恋の始まりとなる。

外見

身長 152 体重 41キロ

B 83 W 54 H 83

黒髪美人でロングで前髪はパツツン

世界観（後書き）

一応メインヒロインと主人公の紹介をさせていただきました。

メインヒロインの登場が遅すぎないかって？

ヒーローは遅れて登場するって言うじゃないですか。

まあ、今度はほかの人の紹介をします。

作者はテストが近いたため投稿が遅くなるかもしれませんがそこは勘弁を、、、

最後に文章力が低く展開が早いこの作品を読んいただきましたありがとうございます！
うございます！！

評価・お気に入り登録をしていただきありがとうございます！！

脱走？（前書き）

祝2000pv!!

評価・お気に入り登録していただきありがとうございます!!

今回はルナと姫のサイドで書きました。

文章力が低いですが、どうぞ楽しんでお読みください!!

脱走？

私達が、今回この学校にわざわざ転校してきたのはある人物を見つけに来たからで、

その人物の名前こそ 桐生 裕 私たちの幼馴染でなのだ。

中学2年まで一緒だったけど、急にどこか転校した。中学の時は御三家の私たちは偽名で

有名私立中学にいたけど、高校入学と同時に正式発表した。

だけど、桐生家だけが、まだで未発表で、このことで世間からいろいろなことが言われているありさ

まだった。

しかし、裕を見つけるのにかなり苦労したよ。日本中のエージェントに指令をだし、

結局見つかったのは2年後の今。そう、私たちは2年前から裕を探し続けていたの。

何ですぐに発見できなかったかって？

それは桐生家の情報管理能力が高くて、高校側の情報では無意味に等しかったのよ！！

結局は全国各地のエージェントをフル活用するはめになってお父様

に怒られたのが落ち。

で、2日前に小さなニュースに裕が出ていたのを発見。即座に転校を決めたのだ。

しかし、裕が通っていたのは普通の公立高校。私たちが行ったら自分自身も危険で、

この学校の生徒にも危険が及ぶため2週間だけという、短い期間で転校が許されたって訳。

しかし、同じクラスになるのは情報操作をしてたから確実だったけど、肝心の裕が

ここにクラスに入るなり探してみたが発見できないという現実には直面してしまったorz

私は自己紹介が終わって姫を襲ってきたクラスメイトを撃沈して席に着いた。

隣の席のクラスメイトはまだ来ていなく、近くにいた、クラス委員のたしか、、、

三崎って子に聞いた。

「ここの、席に座ってる人って男？女？」私は小声で聞く。

「あゝゝ！！男子ですその席は、名前は桐谷君だよ。」敬語と普通の言葉が混じった言葉が

帰ってきた。

BINGO!!私の隣の生徒が裕だった!!姫は私の横だ。

この席の配置はまさしく運命なの!!

「で!!この席の男子は何処に行ったの?」私は続けて聞いた。

「え〜と、霧神さんたいがこのクラスに入ってきたと同時に廊下に飛び出していったよ。」

なんか、かなり焦ってたみたいだったよ!!」今回は何とか普通に話せたようだ。

「ありがとう」私は満面の笑みで言葉を返したのあった。

その後、SHRが終わり、やっぱり探究心が強いこの時期のクラスメイトは一気に話を持ちかけてきた。

えっ!!!どういうこと、、これじゃあ裕を探せないじゃない!ああもう、うっとおしい

しかし、私たちは笑顔を崩さずに答えていった。やっとクラスメイトからの質問攻めが終わったと

思えば、クラス外の生徒たちが雪崩のようにまたクラスに入ってきて、質問攻めが発生。

いいかげん疲れてきた。転校は失敗だったと思えるようになってきた。

そのころ裕は下校の途中であつたのだ。

私はそろそろ、怒りの限界が近くにあつたため、トイレに行きたいからトイレの場所教えてもらえると

聞いてトイレの個室に逃げ込んだ。姫もそうした。もちろんトイレにも私たちの家の管理がきつちり

行われており、盗撮はありえない。万が一しようとしたものは世間から消すからだよ！！私が、

そして女の意地として！！

その後、裕が早退したと聞いて転校初日の授業は終了した。

裕！！いくら家に帰ろうとも無駄よ！今から姫と一緒に自宅訪問してあげるからww

裕はさすがに家まで来るとは思っていなかったようだ。

脱走？（後書き）

今回はルナメインに書きました！！学校生活の日常のショートストーリーは

のちのち上げていこうと思います！！

これからもよろしく願います。

評価・感想お願いします！！まだルートは誰からかは決まってるませんが、

希望のキャラクターがいれば感想で教えてください！

逃走（前書き）

今回は姫のサイドです!!

文章力が低くわかりにくいかもしれませんが文章力を頑張っ
てあげ

思うのでよろしく願います!!

逃走

私はルナちゃんと裕君の家に向かった。

裕君はSHRの内にどこかへ逃げていて、1時間目が始まると同時に早退したようだ。

私も早退しようとしたけど、結局ルナちゃんに初日早々早退はマズイと言われたから、

早退はしないものの放課後に裕君の家に行こうと、結論が出ました。そして今私たちは裕君の家に向かっています。

さすがにリムジンなどのド派手な車は避けて、一見みたら普通車の装甲車に乗って裕君の

家に電撃特攻作戦を実行しようとしているんですよ!!

パパには許可をもらっています。だから時間は大丈夫。

車が止まった。やっと裕君の家に到着したようだ。さっそく玄関の前に立ち、私がチャイムを鳴らし

ました。

チャイムから若い女性の声が返ってきました。

「あの、私たち龍也君のお見舞いに来た、クラスメイトの姫と申し

まします。」返答をした。

「あゝゝ！！ちょっと待っててね。」声が返ってきた。

周りにはSPの皆さんが私たちを守ってくれているので安心して行動が実行できます。

そして、扉が今開きました。そして、若い女性の方が私たちを見て唖然としています。

この方は、裕君のSPの一人だそうです。ついさっき情報部からきた情報です。

「あのゝゝ？裕君はいまこの家にいますか？」ルナちゃんが唖然としている、

若いSPの方に聞きました。「すみません！！霧神様・尾崎様 今裕様はどこかへ外出しています。

ついさつき、何も言わずに出ていきました。」態度が一変しSPとしての口調となって返答がきました。

「ルナちゃんどうする？今日はもう帰る？」私がルナちゃんに質問しました。

「いや、大丈夫よ！！こんなこともあると部下をかなり配置しておいたわゝ！！まって今

聞くから。」そういつてルナちゃんがこの地域に配置している部下に電話をかけ始めました。

そして30秒後……

「姫！！発見したわよ！！てかうちの部下が今裕を引き留めてるから、早く行きましょう！

ここから車で5分くらいのところよ」そう言ってルナちゃんさっそく車に乗りました。

私は裕君のSP兼保護者に挨拶をして車に乗った。

「ウソでしょ！！正体がばれてるし、、、やっぱり、あの時の事件が」そう言つてSPが口を噤んだ。

5分後見事に裕君を発見。外国人のルナちゃんの部下に優しく説明してる最中だった。

そして、車から降りて裕君に声をかけまる。

「お久しぶりですね。裕君！！いや裕様」私が声をかけました。

裕様は驚いています。逃げようとしても周りには私たちの仲間がいっぱい。

これでやっとあきらめてくれたようです！！

逃走（後書き）

読んでいただきありがとうございます！！

評価・お気に入り登録をしていただきありがとうございます！！

逃亡失敗（前書き）

やっと、テストも終了しました。・・・まあ点数なんて気にしない！！
気にしない！！

逃亡失敗

俺はルナたちが俺の家に向かってしていると聞いて、すぐに家から逃げた。

家の方は、カガミネ鏡音に任せておけばいいか。鏡音というのは、今代理で母親役を演じている

俺専属のSPの一人。学歴はSPを育成する学校でトップクラスの実力を持っており、

判断力・行動力はずば抜けているため俺の母親役に抜擢されたんだ。

実際に本当の母親になれば、文句の言いようがないくらいにいい母親になると一緒に

生活する中で思った。

なんで、俺は鏡音を紹介しているんだ?? まあいいや、とりあえず、どこかに隠れよう。

そうしよう。まず、コンビニはかなりの確率で見つかりやすいだろう。

次にファミレスなどのファーストフードの店も外から丸見えなので、すぐに見つかるな、、、

近くにはネカフェといわれるものもないしどうしようか？

そんなとき、いきなり声がかけられた。

後ろを振り返ると、一人の外国人が地図を片手にここにはどう行けばよいのかと言うように

俺に地図の場所を指でさしていた。

それにしても、いきなり返答も待たずに聞くのか……外国人の日本人の印象はどういう

風に思っているのだろうか？

俺は将来家を引き継ぐことになっているので小さいころから多くの言語を習わされた。

英語でどうにかなるだろうと思ったから、英語で道案内をしたら分かっていなかった。

おいおい、英語は世界共通語だろ。まあいいや、もう一度話をよく聞いたら、ドイツ語だった。

それもすでに習得済み。俺は端的にかつ正確に教えた。

すいぶん時間を取ってしまった。15分くらいかったんじゃないかな？

道を教えた外国人はすぐに教えた方向に歩いて行った。

なんか嫌な感覚だ。あと数十秒でなにかが起こる気がする。

そんなとき数台の車が四方を囲むように止まった。

逃亡失敗（後書き）

よんでくださりありがとうございます！！

逃亡失敗？（前書き）

やっと、夏休みがきそうだ！！

逃亡失敗？

囲まれたな、、、！！どうする？どうしようか？

こいつらを片づけるのは簡単だが、誰がこいつらを雇ったのかが気になる。

俺はとにかくこの状況を解決するため、戦闘態勢に入った。

「裕！！何戦おうとしてんのよ！！」「お久しぶりですね。裕君！！いや裕様」

この声が俺の戦闘態勢を終了。

あゝあ・・・見つけたよ。今、ケイドロが終了した。

俺がドロボーで ルナ・姫が警察。結局は逃走は失敗に終わって、捕まる結果となった訳だ。

鏡音はこいつらを止めることに失敗したみたい。

さすがに権力の前にはどんなエリートも無意味ということか。

「俺に何か用か？」俺は投げかける。

「何ってひどいわね！！まあ、目立つからとりあえず車の中に入って！！」ルナが要求してきた。

「断ると言ったら？どうする？」俺が質問する。

「全世界に裕の顔を公開してやるわ!!」とんでもなく恐ろしいことを普通に言った。

まてまて、俺に肖像権がないのかよ。

この世界って理不尽だよな。男女差別撤廃法とか、男女雇用機会均等法とかあるくせに

なぜか、女の方が上だよな。昔は男が上だったけど今となっては・
・・・

家庭では、男が女にしりに敷かれてるって聞くんじ。まあ、とりあえずおとなしく言うことに

したがおう。

俺は大人しく、車の中に乗った。

逃亡失敗？（後書き）

最近時間がありません。まあテストの結果が・・・・・・・・

投稿はしていきますが、文章量が少なくなえることはご勘弁を！！

（●（人）●）ノ ゴメンなさい

真相（前書き）

投稿遅くなりすみません！！まだ見てくれる方々に感謝です。

真相

俺が乗せられた車は、外見は普通車と変わらないが内装はかなり違う。

ふかふかの座席に防弾ガラス要人などなどの凄い車なのだ。

さすがに霧神と尾崎の令嬢が乗る車を一般車と同等の装備ではないと思う。

俺は小さい時から名前は公開されていたが顔は公開されていなかったたので、

こんな重装備の車にも乗る必要がなかった。

でも、リムジンは普通に乘っていたけどね。

「ねえ裕？あんた今まで何で私たちから逃げていたの？それになんでも言わずにどこかに

行ったの？」ルナが早速質問してきた。

「俺は、お前たちが中学卒業と同時に自分たちの正体を明かすから中2の時に引越したんだよ。

それに、高校もお前たちと一緒にだったら余計に俺の正体がばれる可能性がでてるし、

それに事前にこのことを伝えたらお前たちは絶対正体を明かさな

いとか言い始めるから

迷惑が掛からないようにしたまでだ。何か文句はあるか？」

「裕様酷い。文句は多あります。それにいきなり姿を消したから誘拐にでもあったのかと」

ずっと心配してたんですよ。叔父様も裕様のことでは何も言わなかったから。」

早くも罵声がやってきた。

「ゆ〜〜〜〜！！文句はかなりあるわよ！・・・・・・e
tc」これから車の中で2時間

程度二人からの説教続いたと。

「で、2週間後には転校ね！！天神高校では名前どうするの？」
ルナと姫の説教がやっと

終わった。

「えっ！ああ。名前は今のままでいく。ちょっと探り入れたいところがあるから。」

そのことが終わり次第親父が俺のことを発表するよ。」

「じゃあ、なんであの結構レベルの低い学校に行ったのですか？
裕様だったら

公立高校でもトップ校に行けたのでしょくに。」

「そりゃあ、うゝゝゝんなんでだろう？ 気が向くままこって決めたような・・・」

記憶があやふやだった。つい最近のことなのに。

それだけ今までよりもずっと楽しい体験を少しの期間でも体験できたからだと思う。

だから、転校するまでの少しの時間を楽しみたいと思ったから俺はルナや姫と

関わろうとはしなかったんだと思う。

帰宅（前書き）

祝3000pv越え

読者様に感謝です。

帰宅

俺たちは高速をぐるぐる回っていたようだ。

結局俺が解放されたのは10時過ぎ。丁寧に家の前まで送ってもらった。

「今帰った。」そう伝えるとすぐに玄関まで鏡音がやってくる。

「すみません。私がふがないせいで。」

「いや、いいさ。もともとあいつらから逃げ切る自信あんまり無かったから。」

正直あそこまで早く見つかるとは思ってもよらなかった。

見つかるとしても、あと1時間は逃げ切れると思っていたし、囲まれるなんて

考えもしなかったからな。

「今日はかなり疲れたから風呂入ってすぐに寝る。今日のことは気にしなくてもいいよ。」

どうせあいつら二人の情報収集能力には勝てやしなかっただろうし。」

「ありがとうございます。」鏡音には感謝しておかないとな。

短い期間であつたが俺をしつかりサポートしてくれたし、なによりも俺を

1番に考えて行動していたからな。

いきなり話は変わるが、俺は二人と約束を結んだ。

学校ではあまり接近してこないこと。

ただ近くにいるクラスメイトとしての関係であること。

の二つである。この二つのが守れば俺はサイコーの2週間が送れるんだと思う。

ルナや姫も分かってくれていた。自分自身がそうであつたように一般人としての

最後の時間を有意義につかいたかつた。

桐生家を継ぐということは、一般人から要人に変わり命を何時落としてもおかしくな

い立場になるから。それに行動の自由もなくなる。

俺はこんなことを考えながら就寝した。

帰宅（後書き）

よんでいただきありがとうございます。

感想評価まっています。

雑談〜ルナ編〜（前書き）

分岐ルートのひとつです

雑談
ルナ編

ルナや姫にさらわれた事件から数日後。

ちゃんとあいつらは約束を守ってくれていた。

会話は挨拶のみ。まあ、時々ほかの女子がルナたちと会話中に俺に話を振ってきたとき

に話すだけになっていたが、それは、あくまで学校のみでいったん家に帰りつくと

携帯から着信音が鳴りやまない。

俺と絡んでいるイツモノ面子も今までと変わらない態度で接してくれる。

[illegible]

携帯の着信音がなった。

「はいはい。今出ますよ」俺は素早く携帯を開き、発信相手を確認する。

ルナだつた。

「もしもし。花田ですけど？どちらさまでしょうか？」俺は何故か嘘がつきたくなり

花田という苗字にして出てみた。

「えっ？あゝゝゝ御免なさい。間違えました。」ルナが大慌てで謝り発信をやめる。

面白い！！久しぶりだ。こんなにルナが慌ててる声を聴けるのは・・

俺の意見としては実際に生で顔も確認してみたかったがそれもつかの間

すぐにまた発信が来た。

「もしもし。花田ですけど？どちらさまでしょうか？」「またも嘘をついてみる。」

「何言ってるのよ！！バカ！！本当に間違え電話したと思ったんだからね。」「なんか

声が・・・

「いや、スマン。出来心でした。けど久々に聞いたあの度肝を抜かれたような声・・・っぷ」

やばい電話中というのに笑いがでてしまう。

「何笑ってるのよ！！」ルナの怒りのパラメーターが徐々に上がってきたようだ。

20%・・50%・・70%・・99%・・と限界がもう
あと少しの所で

思いがけない言葉が裕から出た。

「いや、怒らないでって！！マジでゴメン。いやけど久々かどうか
は関係あるかどうかは

さだかだけど、ルナの可愛い一面を久々に聞けたから今日は説教
を受けるよ。」

思いがけない一言だった。

鈍感な主人公はゲームやなんやらでけっこう嫌われる。まあその気
持ち私もゲームを

してて何時も気に掛ける部分であつたのに、実際に好きな人からこ
んなに言われると

正直なにもいえなくなってしまった。

今日電話してみても分かったのは、鈍感好きになれないけど、その
鈍感を直す役割が

私ということを。

「おっい！！ルナさん？ヤベっよ、マジで怒らせてしまったと
か。明日が心配だorz」

裕が声をかけてくれているのに黙って考えていたから受け答えできていなかった。

「今日のことは許してあげるから……その……もう一回言って」

自分の声がだんだん小さくなるのが分かる。

「おー！やつと出てくれた。スマン最後の方が聞き取れなかったからもう一回いつてくれる？」

「だから……私が黙る前に言っこともう一回いつて！！」勇気をだして言った。

「えっ？ああ。じゃあもう一回言っぞ。いや、怒らないでって！！マジでゴメン。」

いやけど久々かどうかは関係あるかどうかは、さだかだけど、ルナの可愛い一面を

久々に聞けたから今日は説教を受けるよ。これでいいか？」

「うん！！ありがとう！！お休み！」そういつて一方的に通話を切ってしまった。

電話を切つて分かったことが一つ。

私はとんでもなく、恥ずかしいことを言わせていてことを。

雑談〜ルナ編〜（後書き）

読んでいただきありがとうございます！！

今回は一応ルナルートで書いたつもりです。

評価・感想受け付けております！！

雑談く姫編く（前書き）

どうもです。PVがやっと少しずつ伸びてきました。

読んでくれている読者様に感謝です。

前回から一応イベントを少しの間書いていこうと思います。

雑談く姫編く

ルナや姫にさらわれた事件から数日後。

ちゃんとあいつらは約束を守ってくれていた。

会話は挨拶のみ。まあ、時々ほかの女子がルナたちと会話中に俺に話を振ってきたとき

に話すだけになっていたが、それは、あくまで学校のみでいったん家に帰りつくと

携帯から着信音が鳴りやまない。

俺と絡んでいるイツモノ面子も今までと変わらない態度で接してくれる。

「ありがたいよな〜！！さすがと言うべきか・・・」「そう独り言を言っていたら

ノックがされた。

「どうした？何かあったのか？」普通はこの時間、鏡音は俺の部屋を訪ねてくることは

無い。何か緊急事態が起こったのか！？

「あの〜裕様。えっと・・・あの〜」妙に戸惑っている。

「何かあつたんだ？」

「あのくく尾崎様が裕様を訪ねてきています。」鏡音は驚きを隠せないようだ。

おいおい、一応財閥のご令嬢だぞ。こんな時間に尋ねてくるなんて。下の方では、俺の父親役の癒崎ゆきが対応をしているようだ。

癒崎と鏡音は相性はいいが、恋愛の方では全くとっていいほど興味がないらしい。

「分かった！俺の部屋に呼んでくれ！」そう鏡音に伝えると、すぐにトタトタ音がなった。

姫が階段を走って上っているようだ。一応言っておくが俺の部屋は2階だからな。

トントンドアがノックされた。

「どうぞ！」

「こんばんわ裕様。」姫礼儀は天下一品だ。

「おいおい姫さん！！こんな時間にどうした？一応今お前は尾崎の令嬢なんだぞ。」

俺もやはり焦りが出ているようだ。

「もうしわけありません。けど、けど裕様にせっかくあったのに学

校で話せないものですから

きてしまいました。」やはり姫も申し訳ないと思ってはいるようだ。

「分かったから。これからこんな危険なことはしないでくれよ。パラッチに見つかったら

めんどくさいから。あとSPはちゃんと連れているか？」

「はい！そのことは大丈夫です。」そこところは問題ないようだ。

それから俺は姫の愚痴や、学校での体験談など他愛のない会話で盛り上がった。

気づいたらあつというまに30分が過ぎようとしていた。

「裕様！今日は本当に少ししか話せませんでした。それに夜遅くにうかがってしまい

申し訳ありません。けど、二人でゆっくり会話できたので嬉しかったです。

じゃあ、また明日。風邪に気を付けてください。」そう言って足早に去ろうとした

姫を俺は抱きしめた。

何故だか分からない。姫は特に不安が大きくなると気がめいることが多い。

だから体が自然にこう動いたと思う。

姫は嫌がらなかった。そして、数秒後黙ったまま振り返らずにそのまま下に降りて行った。

今考えるとトンデモなく恥ずかしい行動だった。

俺何してんだろ不思議と恥ずかしさでその日は眠れなかったとか・
・・

姫SIDE

裕様がいきなり私を抱きしめてきました。

・・・・・言葉がで
ません。

私の顔はいま絶対に赤くなっています。

最初は抵抗しようと考えましたがこんなことルナちゃんもされてないと思うと

優越感がうまれてきましたから抵抗しませんでした。

数秒後裕様がゆっくり私から手を放していきます。

このままがよかったと思いましたが、私がどうにか、なりそうなので諦め

私は何も言えないまま下に降りSPの人たちと家に帰っていきま
した。

雑談く姫編く（後書き）

このごろ小説を書いてて思います。どうにか

「た」など決まった語尾になってきていることを直したいと！！

評価・感想お待ちしております。

雑談／凍編／（前書き）

祝PV4000突破 ユニーク700突破

読者の皆様に感謝です。

雑談／凜編／

今俺は、学校の正門の前までやってきた。

昨日結局逃走を図ったものの無意味であり、今日はあの二人が約束を守って

くれるか心配になってくる。

俺も心配性だな。何故か二人をあまり信用できない。

「おつはよ。。」」大声と同時に背中に何か脅威を感じる。

即座に回避行動に入り、背中への攻撃だけは避けれたようだ。

あぶね。！！挨拶と同時に攻撃を仕掛けてきたのは凜だった。

「お前。！！朝っぱらから暴力やめようよ。」

「いいじゃん！別に。どうせよけられるし。」凜が笑顔で返答してくる。

おいおい、まあいいや。今日も変わらずに接してくれる。

俺はそのことに関してだけ感謝していた。まあ、凜が権力に屈する人間じゃないだろう、たぶん。

「ありがとな！！今日も変わらずに接してくれて。感謝する。」

「な〜に言ってるの？友達でしょ。それは変わりのない事実なんだからさ」

たぶんこんなことを言ってくれる人間は少ない。

中学時に仲の良かった友達でも、俺の正体を明したら・・・言うまでもないだろう。

だからかな、こんなに気分がいいのだろう。

「どうした？ボケーっとしてるよ。何考えてんのさ？」いつの間にか俺は

考え込んでいたようだった。

「いや何でもないさ。ただ今の日常に感謝してるだけ。これからも

よろしく頼むよ凜。」俺はたぶん生きているうちに最高の笑顔で、凜に感謝の気持ちを

伝えていたようだ。

凜SIDE

今日の龍也いや、裕かな？

まあどちらでもいいや。何か何時もと違う気がする。

なんていうのかな？雰囲気が今までと違ってる。

前よりも絶対に明るくなってるんだ。

龍也は桐生家の人間でもあり、僕の友達でもある。

だから、龍也が転校する日まで龍也にとってサイコーの友達をするんだ。

何があっても僕たちは親友。

そう思い龍也に声をかけていく。

そうしたら、

「いや何でもないさ。ただ今の日常に感謝してるだけ。これからもよろしく頼むよ凜。」とサイコーの笑顔で反応してくれた。

今僕は何故だか顔が赤いきがする。龍也に見られたくない。

そのまま僕は龍也に何も返答できずに走って教室まで行ってしまった。

雑談／凍編／（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

評価・感想おまちしております。

夢（前書き）

一回分岐ルートを終了します。

夢

周りには多くの桜の花びらが散っている。

風が吹くと、花吹雪が起こった。ここは何処？

今、自分がいる場所がどこかも不明だ。状況確認の為に周りを見回すと

多くの桜の中に一本だけ大きく花びらの色が違う桜が堂々と立っていた。

その桜の木の花びらは赤い。何故だかわからない。懐かし感覚だ。

昔、ここに来たことがあるのだろうか？

俺は目を閉じ思い出を探る。いや、記憶の中にやはりここには来たことが

無いようだ。

そして、目を開けると桜の木にひとりの少女が寄りかかっていた。

俺は何故か声をかけていた。

「ねえ君？」しかし声をかけた瞬間こちらを見てすぐにどこかへ走り去って

しまった。

追いかけてよとすがすがすが動かない。そろそろこの夢の終わりが近いらしい。

周りがだんだん白くなっていく・・・

夢（後書き）

感想・評価お待ちしております

夢？

びびっ びびびびびびびびびびびびびび

目覚ましが耳元で大音量でなっている。

うるさいと思うもののこれが目覚ましの仕事。

さっきの夢は妙にリアルだったな。夢はだいたい起きたと同時に忘れる

ことが大半なんだが、今日の夢だけはかなり印象に残っている。

何だか精神だけが本当にあそこの世界に連れて行かれたみたい

感覚だ。

ガチャ！！ドアが開いた。

「おはようございます！朝です。朝食の用意が来ていますので、着替えが終わり次第

朝食をおとりください。」

鏡音がいつものように俺を起こしにきた。

俺は普通目覚ましで起きる場合と起きない場合があるため毎朝起こしに来ることを鏡音

に頼んでいる。

「おはよう！すぐに行く。」簡単に挨拶を終えると鏡音はリビングへと戻っていった。

今日は何か起きるのか？その前触れなのか？こんなことを思いつつ、顔を洗い行つて、着替えをすましリビングへ。

「今日の朝食は何？」俺は毎朝聞いている。

鏡音は料理は一流なんだよ。まあSPの方も一流なんだがな。だから毎朝の楽しみなんだよ。

「今日はトーストとサラダです。どうぞお召し上がりください。」

これは、一般の朝食に思われるだろう。しかし、違うのだよ。

何がって？それは素材の一つ一つにこだわっているため市販のくらべもの

にならない。

ついでにブラックコーヒーが飲みものね。

「いただきます。」……………

時間が少し進み…

「じゃあ、行ってくる。」俺は鏡音にいつてきますの挨拶を行つて

から家を

飛び出す。鏡音は親父たちの護衛に入る。

俺はまあ小さいころから多くのことをしていたためSPがいなくとも問題ない。

結局のところは、SPは多くの場所に行くため顔が知られていることがある。

そのため、毎朝俺を護衛していたら、俺の正体がばれる可能性があるために

SPを付けない。

後7日しか、あの面子と過ごせない。

だから、俺はテンションを上げて行こう。

夢？（後書き）

どうでしたか？今回は前話の続きです。

次話から、読者の皆様が楽しめる話を用意しております。

文章力が低くてすみません。

感想・評価お待ちしております。

学校生活（前書き）

読者の皆様お久しぶりです。

夏休みを満喫していましたw w

では、どうぞ

学校生活

扉を開けた。まあ言うまでもないけど

今日はルナたちが転校してきて5日がたった。

最近クラス、いや学校の中であることがささやかれていた。

それは、ルナや姫が転校してきた時に言った言葉が原因。

「それは私たちのフィアンセがこの学校にいるからですよ！」

これが今の話題です。この発言のせいで、男どもが

俺が俺がとフィアンセを主張している。女子はバカを見るような冷たい視線を送っている。

実際フィアンセを探しているのは嘘。俺を動揺させる罠だったのだろっ。

しかし、裏腹にこの噂はネットでも流りかけているとのこと。

さすがに霧神や尾崎の本家の方々が抑制しているみたいだけど。

「なぐに突っ立ってるだ！！」後ろから声がかけられた。

六が不思議そうな顔で俺をうかがっている。

「いや、なんでも無い。」俺はクールな人のように立ち振る舞って

みたが、六

には面白かったらしく笑っている。

「早く行かないともうすぐ姫様たちが来るぞ。」そうだった、ルナと姫はいつも決まった時間に来る。

しかもドアの入りに突っ立っていたら邪魔になる。早く自分の席に移動しよう。

俺はすぐさまドアの前から移動した。

それから数分後。

廊下が騒がしくなってきた。いよいよプリンセスたちの登場だ。

早速親衛隊やファンクラブが出来てお近づきになろうと考えている男子連中がわんさかいる。

でも、霧神や尾崎のボディーガードは堅い。てか、みんな俺らと同じ年なのになんか強い。

男のボディーガードは学校ではつけない主義らしい。

く
ルナSIDEく

もうすぐで教室に着こうとしていたら突然今にも俺ヲタクですてきな男が前の現れた。

ボディーガードがすぐさま臨戦態勢に入る。

「ちょっと待ってください。自分は霧神ルナ様ファンクラブ会長のFといいます。……」

Fが自分を紹介している。いかにも自分は学校でモテているや私に對しての気持ちなどなど。

はつきり言つて気持ち悪い。正直ファンクラブなど作ってほしくなかった。

Fの後ろにはたぶん会員と思われる男が並んでいた。

姫はかなりおびえているし。

「どうかここにサインをして公式ファンクラブと認めてください。」

Fが熱心に願つてきているが

「ごめんなさい。この学校ではみんなと普通に接したいからファンクラブとか

やめてもらえるかしら。」

優しく言つたはずだ……たぶん。

裕以外の同年代の男は興味が無い。

「そこを何とか。お願いします。」

Fは粘つたあげくボディーガードを押しつけてこちらに来ようとし

た。

言わなくても分かるよね？

速攻撃沈。押さえつけるのではなく空中散歩に送った拳句、ドスンと落ちる。

もちろん私はやってないよ。専属のボディーガードが終了させていた。

姫はアワアワとまだ動揺していた。

肥ったあげく汗ダラダラで迫ってくるんだよ。心霊体験より怖い・
・絶対。

無駄な時間を使ったあげく教室にやっとのことであどり着いた。

学校生活（後書き）

文章力を上げたいこの思いから練習用に書いてます。

<http://ncode.syosetu.com/n1062w/>

ぜひ感想・評価ください。

転校（前書き）

学校生活の話は順次投稿していこうと思います。

転校

今日も雲一つない晴れの日。しかし俺の空は違った。少し雲が多い。なぜなら、

とうとう転校の日がやってきたからだ。

普通転校すると言えば朝挨拶をして、転校していくものだが、俺の場合は違う。

俺は今日この学校で思いっきり楽しんで転校していく。

ルナや姫はもうもとの学校に戻っている。おっと今の時間を言っていなかったね。

今はもう10時過ぎ。ルナたちは朝のSHRで少し挨拶をしていただだけだ。

今日の授業は全く頭に入らない。片耳に入ってきた音はもう一方の耳から逃げていく、

そうついた感覚なのだ。

きゅんくゅんかゅんくゅん。授業の終了を知らずチャイムが鳴り響く。

『ありがとうございます。』

「今日で終わりなんだよな。」六が何気なく話しかけてくる。

「なぐに。終わりじゃないさ！！新しく始まるんだよ。」元気に返事をして見せた。

凜たちに声をかけようとしても、俺から逃げていく。

何故だろうか。やっぱり転校のせいだと思う。

「なあ龍也。今日帰りファミレス行こうぜ！！みんな誘って。」

なんだか、泣けてくるな。しかし、涙も出てないのに、何故だか視界が歪んでいく。

だんだん周りの光景が白くなっていく。

どういうことだ。いったい何が起きているんだ。俺にも何が何だか、分からない。

言えることは一つ、焦点が定まったきた世界は一回俺がここに来たことがあるということ。

それは桜の世界。ここはまるで桃源郷のようだ。視界一帯に見渡す限りの桜。

散っても散っても花吹雪が収まることもない。

俺は、前回同様大きな桜の大樹の元に行った。今回は前回と違い俺と同じくらいの女性が

そこに座っていた。

「すみません。」声をかけてみる。

「えっ！」当然ここには誰もいないと思っていたのか、声をかけられて驚いている。

「あの〜。ここがどこかご存じですか？」

「えっ、君どうやってここに来たの？」俺が聞いたことは無視される。

「それが俺にもよく分からないんです。視界が歪んだと思ったらここにいました。」

「そうなの。私も一緒よ。だから、ここは何処かは知らないのよ。ごめんなさいね。」

女性も俺と同様ここに来た所以を知らないらしい。

「そうですか。俺は桐生裕って言います。」

「私、尾崎瑠理香っていうのよ。よろしくね。」尾崎だと・・・それに瑠理香って

嘘だろ。尾崎家初代当主じゃないか。俺たち御三家はそれぞれの歴代当主ほとんど

知っている。尾崎瑠理香は明治時代、女性差別がひどい中一人で会社を立ち上げここ

まで上ってきた。御三家は初代当主達が仲の良い幼馴染だったとも言われて、

お互いに助け合っていたとも言われている。

「あの、尾崎さんはどの時代からやってきたんですか？」

「尾崎さんじゃなくて瑠理香でいいよ。私は明治時代だけ。そういえば龍也君、

見慣れない服着てるね？」

やっぱり。この人は尾崎家初代当主で間違いない。

「俺は、三聖って時代から来ました。えっと、簡単に言えば瑠理香さんの生きてる

時代よりも何年も先の未来です。」

「え〜〜！！すごいね。で、未来はどうなってるの？」

「えっと、率直に言います。瑠理香さんあなたは会社を経営してますね？」

「ええしてるわよ。男女差別の時代はもう終わったと思うからね。」

「仲間に桐生・霧神がいますね。」

「何で知ってるの？あつ……桐生って。」

転校？（前書き）

コッコッPVが伸びてきています。読者に感謝。

転校？

「じゃあ……創也君の子孫ってことになるの？」

「ええそうです。創也は現桐生家初代当主です。瑠理香さんとはかなり関係が深い

です。」

瑠理香さんは驚いていた。そうに決まっている。俺が逆の立場だったらこうなるだろう。

しかし、お互いの正体があったとたんまた視界が歪んでいく。

タイムパラドックスが起きなければいいんだけど。

まだ、何か瑠理香さんが話している。瑠理香さんはこの世界が歪んでいていないらしい。

「あのね……わ………こど………そ………でき………」

何を言ってるのか分からない。そして今度は勢いよく真っ黒な世界になった。

また今度行けたときに聞いてみよう。てか、瑠理香さん姫と瓜二つだったな。

俺は考えてみた。俺の神はあの世界に俺を連れていき何がさせたかったのか。

そして、あの赤い桜の存在。俺が一回でも行ったことがあるようだった。

「お~~~~い!!おきろ~~~~。とつくに授業終わったぞ~~~~」

声がかけられた。六のようだ。

「あ~~~~。ありがと。てか何時の間に俺自分の席に戻った?」

「お前、何言つてんだ?俺が声かけて適当に話した後すぐに戻ったろうが。そして授業中」

珍しく居眠り。これがYOUの今までの行動です。」

「まったく記憶にないな。」

たしか、俺は陸と話していた時にあの世界に飛ばされた。いったいどういうことなんだ?

転校？（後書き）

感想を書いてくれたら自分泣いてよろっこびます

転校？

今はもう夕方。空はオレンジ色に染められつつあった。

そして、今日俺はこの学校での学校生活が終了。明日からはほかの学校で学生生活を送ることになっている。

明日からはどんな毎日に代わるのだろう。今までとは違い、バカなことをやって騒げなくなつて今までとは

違つた風景が見えてくるのだろうと。

しかし、俺はこの学校を去るのに心残りがあつた。それはいつも一緒にいた、美沙や凜たちにちゃんと別れ

の挨拶ができていないこと。声を掛けようとしてもすぐに何処かへ行つてしまう。

結局別れの挨拶ができないまま、放課後を迎えてしまった。六は俺のためにどこかのファミレスでお別れ会

的なものを開いてくれるらしい。俺はそこが最後のチャンスだと思う。

そこでしっかり、挨拶をしなくてわ。

てゆるるる。携帯が震え始めた。おつ、六からだ。場所が整つたのだろう。しかし、本人がお別れ会を

知ってるって、なんか悲しいな。やっぱり本人に教えなくてやってほしかったけど、こんなことをしてくれる

友達何て向こうに行けば、そうはいないだろう。いたとしても桐生家といい関係でありたいというのが大半を

占めるのは確実だ。

・・・少し時間がたち・・・

俺は今とあるファミレスの前に立っていた。ここで俺のお別れ会が行われるらしい。

しかし、問題なのは彼女たちがこの席にいてくれるかということだ。

こんなことを考えていても時間の無駄だ。早く中に入ろう。

俺は全自動ドアをくぐり、中にはいった。

「いらっしやいませ。おひとり様でよろしいでしょうか？」

「えーと、友達がもう先に来てるんですけど。えーとあそこです。」

六たちはすぐさま見つけた。六は俺が来たことを気づいたらしく、俺に向かって手を振っていてくれた。

「わかりました。」そう言つと店員は六たちの席まで案内してくれた。

やっぱり、一番驚いたのは、彼女たちが笑顔で俺を迎えてくれたことだ。

しかし、笑顔といってもいつもの笑顔ではなかった。

転校？（後書き）

投稿遅れてすみません。

近々テストがあるので投稿遅れました。

評価・感想くださいね！！

転校？（前書き）

遅くなつてすみません。

テストがまた近くにあるので更新遅くなります。

転校？

「やっと来たかー！！早くはじめようぜ！」六が出迎えてくれた。

席は一人掛けの椅子。配置図はこんなもんだ

凜 一 一 六

美沙 一 一 三崎さん

俺

席に座って声をかけてみるけど返答なし。

3人の女子の方々は口をあけようとしなかった。

「おいおい、黙り込んでないで、騒ぐぜ」六ただ一人がしきりに頑張って盛り上げようと

してくれた。「ありがとな、六！それと、皆この2週間ありがとう。俺はこの2週間みんなに

普通に接してきてもらえた。実際俺のことを知ってる人間は皆、謙遜するか、取り入ろう

とするかの二つの人間しかいなかったんだ。けど、ここの学校にきて多くのことを学ばせて

もらったよ。美沙、いつも優しくしてくれてアリガトナ！凜、朝の張り手いつくるか楽しみに

まっつたよ。三崎さん、ちゃんと話せるようになって少しの時間だったけど楽しかったよ！

六、いつも俺の前で元気でいてくれてあんがと。俺は今日この地から去るけど、また戻っ

てくる。絶対に！！だからさ、最後の時くらい笑顔で話させてくれよ！」俺のありのままの

気持ちを伝えた。少しも立たないうちにすすり泣く声が聞こえた。

凜だった。いつも人前では責任感が強く絶対に泣いたりしない。俺はこの数か月でこんな仲

間が作れた。あっちの世界より絶対にこっちで暮らすほうがいいんだと思う。

けど、俺が家を継がないと家族・親戚・その他大勢に迷惑がかかる。だから、いやでも……「ねえ……龍也。絶対に……また戻ってきてくれる？」

凜が泣きながら聞いてくる。「ああ！絶対に戻ってくる。約束だ！」

「龍也……僕、もっと一緒にいて遊びたいよ！話たいよ！」美沙が必死に訴えかけてくる。

「俺も、ここに残れるなら残りたいさ。けど、そうしたら周りに迷惑がかかる。大人に

なっていくって、「ううことを乗り越えないといけないと思うんだ。」

「ゴメン。自分勝手のばっかいつちゃって。」美沙の口も少しずつ動き始めた。

転校？（前書き）

今回でやっと転校の話が終わりました。長々とすみません。

転校？

「龍也君……今までありがとうね！！少しの間だったけど私も

これまでに以上楽しい学校生活送らせてくれて。絶対に戻って

きてよね。」三崎さんが顔を伏せながら言ってくる。こんなこ

と今まで生きていく上で思わなかった。仲間ってこんなにも必要に

思える時が俺にも来るとは思わなかったよ。中学のころは、友達に

いても友達でしかなかった。それ以上の関係に進まなかったのだ。

けど、高校になって、親友という物ができたんだ。「龍也！皆の

気持ちしっかり受け取ったか？俺たちはこれから会う機会が皆無

といってもおかしくない関係になる。だからさ、今日はめいっ

ぱい楽しもうぜ！よし皆さっさとドリンクバーでジュースついで

来て乾杯するぞ。時間を友好的に使わなくちゃな。」六に全部い

いところを持って行かれた。まあいいか。関係修復かな？

それから数時間俺はみんなと食べて飲んで話して楽しんだ。

「もう9時か……。そろそろお開きやな。」「そうなるね。」

さすがに僕の両親も心配するよ。」「私も。」

と時間が来てしまった。早かったな。「今日は、俺が奢るよ」

『えっ……でも』『気にしない、気にしない。』『ここまで

俺を楽しませてくれた。たぶん今までの生涯で一番楽しかった

だろう。」「じゃあ……お願いするね!」

それから俺が支払い外へでた。

「ねえ、みんなで最後に写真撮らない?」と三崎さんが。

「おお、いいじゃん。」とみんなが口をそろえた。

……「皆準備はいい?いくよ」とタイマーをセットした三崎さんが。

ボタンを押し、すぐに駆け寄ってき準備が出来た瞬間にパシャとフラッシュ。

そして、写真を撮ったのちそれぞれの帰路へといった。俺は駐車場にいた鏡音

乗っている車に乗り込み、本家へと車を進めた。

転校？（後書き）

感想・評価お待ちしております。

帰宅（前書き）

更新遅くなってすみません。

テストの点数がね・・・単位が・・・

帰宅

「裕様よかったのですか？こんな風に終わらせて。」鏡音が運転席から聞いてくる。

「いいんだよ。所詮俺はこんな運命が待っているだけさ。足掻こうとしたら周りに

迷惑かける。だったら悲しみが大きくならないうちに立ち去りたかったんだと思う。」

鏡音にも迷惑かけまくったな。今までありがとう。」

「いいえ、気にしないで下さい。自分が望んでこの仕事についているのです。」

こんな回答が返ってくるとわね……

「裕様もうすぐ本家に付きます。ご準備を」もう着くのか。何年ぶりだろうか……

本家には何年も戻ってない。まあ、いろいろあるんだよ。窓越しに外を見る。

大きな門が車の前に立ち阻む。

しかし、久しぶりに見たがこの家につながる門は大きい。

と、門の前に着き鏡音が警備員に証明書を見せる。そして門が開き車を中に進ませる。

だが、なぜか急に風景が変わってくる。見える世界が白色に染まっていく。またか……

また、あの桃源郷のような世界に誘われるのか……

視界に色が戻ると、桜吹雪の世界が広がる。本当にここは何処なんだよ……

いつもどおり桜の大樹のもとへ行く。今回は4歳くらいの男の子が桜を見上げていた。

男の子のへ近づこうとすると、向こうの方から俺を気が付いたらしくこちらに駆け寄ってきた。

「おと~~~~~~~~!!ここ何処?」と俺に対して走りながらいつてくる。

「え~~~~と。俺も知らないな~~~~」ん。まてまて何かさっきの発言の中に消化しきれない

単語が混じっていたぞ………?

あつ「おと~~~~」という単語だ。おと~~~~という単語は多分、父に向けていう言葉と思う。

いや、俺も小さいころよく言っていた覚えがあるからきつとそうだ。

後ろを振り向いて他に誰かいないか確認してみるけどやっぱり誰もいない。

そして、ズボンが引っ張られる。

「おと〜。ここどこなの？僕初めて見たよこんなきれいな場所。」

「え〜っと……。俺は君のお父さんじゃないよ。」と試みるが

「うっそだ〜!!どう見てもおと〜だよ。」俺はそんなにもほかの誰かに似ているのか？

「じゃあ、僕の名前は？」重要なことを忘れていたようだ。名前を聞かなければ何も分からない。

帰宅？（前書き）

またまた遅くなつてすみません

帰宅？

少年はなんでそのようなことを聞くんだった？というような顔をしていた。

そりゃ当たり前か。父と思い込んでいるのにな。

「おとゝまだ僕に意地悪するの？僕は桐生正宗だよ。」

ぐ（。D）「オイオイ、これまた俺のかなり昔の先祖さんだぞ。ここは時間軸がどうなっているんだよ。」

「ごめんね。正宗君。俺は君のお父さんじゃないんだ。俺は桐生裕つていうんだ。」

最初は疑っていたようだがだんだん理解してきたみたいだ。

「あつ・・・本当だ。・・・ごめんなさい。間違えていました。」
正宗君が誤ってくる。

ここは礼儀正しいな。さすがにこういうところはきちんと教育されている。

「けどね・・・本当におとゝに似てるんだよ。」

そう正宗君が言つと俺の視界がまたぼやけてくる。ここで俺の桃源郷から現実世界に戻される

ようだ。つい最近でイロイロなことが起こる。何かの前触れなんだ

ろうか。

「裕様……裕様……」俺の名前を誰かが呼んでいる。誰だろ
うか……

ああ、鏡音か……。「すまない。少しボーとしていたようだ。」
窓から外を見ると景色が動いていなかった。目的地に到着したみた
いだ。

俺はすぐに車から降り大きな玄関を潜り屋敷の中へと身を進めた。
中には数十人の使用人たちが同時にに挨拶をしてくる。

俺としては家族同様の扱いをしてほしいんだけどね。

しかし、現実はそのもいかない。と思ったところで初老の執事が目
の前に現れる。

こいつはグラス。執事長をしている使用人のトップの人間だ。

仕事はまだまだ一流であるんだ。「お久しぶりございます裕様。さ
あ、旦那様が奥の部屋で

お待ちになっております。

「分かった。ありがとう。」俺はすぐさま親父のいる部屋に行く。

そして、ドアを開けた。

豪華な椅子に一人堂々と座っている男が一人。こいつこそ、我が桐生家現当主 桐生 正之。

そして俺の親父である。「よ～～！久しぶりだな裕～～！何年ぶりだ？まあ細かいことはいいか。」

こんな性格の持ち主でもある。まあ一般向けの顔ではないんだが。

「久しぶりですね親父様。なんといっても今回の処置感謝してるよ。まあもう少し桐生じゃなくて

桐谷で過ごさしてもらうけどね。」

「な～～に一言ってるんだ？子供が親に迷惑をかけるのが普通だ。それに、そうじゃないと子育ても

楽しくない。」

さすが俺の親父。心が広いですね。「さあ、そんなところに突っ立てないで食事するぞ！」

えっ……さっき食べてきたんだけど。

ショウガナイ、腹をくくるか。こうして久々の親子どうしの食事が始まった。

帰宅？（後書き）

文章をもっと分かりやすくしてくれる方募集します。

（自分の文章が伝わりにくくなっているような気がする）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5159t/>

ミステルス～赤き桜の奇跡～

2011年12月21日21時47分発行